第２６号（2016 年秋～冬）
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7 セブンプラス

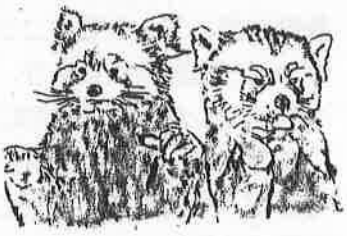
ボランティアがえらんだ

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください。

①健在！　風太くんファミリー
― シセンレッサーパンダ ―

レッサーパンダの鳴き声を聞いたことがありますか？野生では一頭ずつで暮らしていて、普通はほとんど鳴くことがありませんが、たまにオスとメスや親と子が高い声で鳴き交わすことがあります。特に恋の季節（１～３月）には、オスもメスも相手を探して鳴くそうです。当園のパンダたちも、高いかわいい声で鳴くことがありますよ。耳を澄ませてみてください。

現在当園には、あの立ち姿で有名な風太の家族９頭がいます。もともと中国の山の上で暮らす動物なので、暑さは苦手ですが寒いのは大丈夫！特に朝と夕方、元気に動き回ります。午後１時半からの食事時間には、竹の葉やリンゴを食べる様子が見られ、飼育係さんのとっておきの話が聞けるかもしれません。



②へんな声で鳴く鳥
―エミューとフサホロホロチョウ―

オーストラリアの飛べない鳥、エミューがどんな声で鳴くか、知っていますか？　「ボン、ボン」という低い音で、楽器のコントラバスをつまびく音や太鼓の音に似た、鳥の声とは思えない不思議な音。このように鳴くのはメスだけです。当園には鳥類水系ゾーンにオスとメスのエミューがおり、外見はよく似ていて見分けがつきませんが、鳴くとメスだとわかります。

トナカイの向かいにいるフサホロホロチョウも、マネのできない変わった声の持ち主です。ヒグラシ（せみ）やコオロギの声に少し似ているかも。めったに鳴きませんが、鳴くと大声で、レッサーパンダのあたりでもよく聞こえます。

変な音が聞こえてきたら、声のぬしを探してみてください。意外な動物かもしれません。

③空飛ぶ　ほにゅう類
―デマレルーセットオオコウモリ―

オオコウモリと言えば「バットマン」を連想しがちですが、スズメより少し大きいくらいで、目がクリッとしたキツネ似の可愛い顔。英国ではフライング・フォックス（飛ぶキツネ）と呼ばれます。

生息地は南アジア（スリランカを含む）から東南アジア、インドネシア、中国南部までの広い地域で、洞窟や使われなくなったトンネルなどをねぐらにしています。

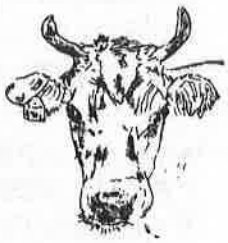
当園にいるのは全て（65 頭）当園で生まれた生粋の千葉っ子です。エサはバナナ、リンゴなどの果物が主ですが、野生では花や花粉も食べるので、ハチなどのように花粉を花から花へ運ぶ役割も果たします。昼と夜が逆になっている夜行性動物展示場では、10 時過ぎにエサを与え始めてから２時頃までは活発に活動していますが、それ以降は翌日まで上にぶら下がったままジッとしています。

④耳につけたマイナンバー
― ウシ（ジャージー） ―

子ども動物園で白牛と暮らす茶色い牛は名前はアッシュ（2001.7.1 生、メス）。ジャージー種の乳牛で、原産地はイギリスのジャージー島です。

ジャージーの乳は脂肪分が多くバターやチーズに適しています。１頭の乳量は年間約 3500 kgでホルスタインの 2/3 ほど。国内には約１万頭が飼われています。

両耳の黄色い耳標（じひょう）には 10 ケタの数字が刻印されています。国内の牛はすべて、出生と同時に装着し登録することが義務づけられていて、この数字により生年月日、血統などがわかります。万一伝染病が発生したときなどのために、きびしく管理されているのです。



アッシュには角がありますが、通常はケンカなどによるケガ防止のため、角は生後３ヶ月までに焼きます。

⑤折り紙のツルも　この鳥です

― タンチョウ ―

タンチョウは、古来より吉兆のシンボルとして花鳥画のモチーフになり、「鶴の恩返し」などでも日本人にはなじみの深い野鳥です。北海道の釧路などでは留鳥として１年中見ることができますが、実物を見られている方は案外少ないのではないでしょうか。当園の水禽池には1997年に当園で生まれたメスがいますので、ご覧ください。

「鶴は千年」と言われるように結構な長寿で、およそ60歳まで生きると言われています。頭が赤いのは実はニワトリのトサカと同じく赤い皮膚で、羽ではありません。漢字の「丹（赤を意味する）頂」はここから出ているようです。食性は何でも食べる雑食で、当園ではペレットや小松菜、ワカサギなどを毎日一回与えています。

⑥顔はコワいが　おだやか家族

― クロザル ―

クロザルは、インドネシアのスラウェシ島に群れで暮らすサルです。数年前に野生のクロザルが写真家のカメラを使って自撮りした写真が評判になり、著作権問題にまで発展しました。その面白い写真はネットで見ることができます。

当園では、昨年ルーラ（♀）がレン（♀）を、今年はルリ（♀）がタイガ（♂）を産んで５頭の家族になりました。お父さんはジョニー。生まれたばかりの子の顔は肌色ですが、成長するにつれ黒くなり、頭の毛も逆立ってきます。

おとなの顔はこわく見えますが、実は温厚な性格。豊かな顔の表情でコミュニケーションをとり、ケンカにならないようにしています。今なら子ザルたちが、きょうだいで仲良く遊ぶ姿が見られます。

★ボランティアが毎月第２、第４日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイド「ZOOボラ・クイズDEガイド」をしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

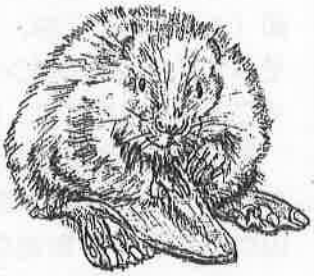
★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

⑦泳ぎの得意なネズミの仲間

― アメリカビーバー ―

アメリカビーバーは、北米の水辺に棲むネズミの仲間で、水かきのついた後足とパドルのような平たいシッポを使って自在に泳ぎます。

当園のドン（オス）とピン（メス）のペアに５月７日、２頭のこどもが生まれました。このペアからの出産は３回目です。２か月ほどはお母さんからお乳をもらっていましたが、現在は離乳して親と同じものを食べています。当園でのエサは、サツマイモ・ニンジン・小松菜・キャベツ・パンなど。また、季節に応じてトウモロコシや梨などが追加されますが、トウモロコシが好きで最初に食べ始めるそうです。



夜行性なので、昼間は部屋で休んでいることが多いですが、午後の遅い時間になると元気に泳ぐ姿をご覧になれます。

★ボランティアによる「絵本のおはなし会」が毎週土曜午前11時30分より12時まで動物科学館２階図書室で開かれます。小さいお子さんはぜひどうぞ。

第２７号（2017 年春）
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7

ボランティアがえらんだ

セブンプラス

昨年の春、開園以来初の大型肉食動物として迎えられ、すぐに来園者の皆さんの人気者になったライオンのトウヤとアレン。新しい環境にも慣れ、落ち着いた毎日をおくっています。

―トウヤ―

トウヤは2010年12月23日に多摩動物公園で生まれたオスのライオンです。2010年生まれのため「10」にちなみトウヤと名付けられたそうです。人に育てられたアレンとちがい、ライオンの両親に育てられたため、野性味があります。新築にて入居した個室にも慣れ、安心した毎日を過ごしています。トウヤの１日の様子は…

毎朝９時過ぎに個室を出、広々とした平原の展示場に放たれます。まもなく大勢の入園者がやってくる時間。あくびをしたり全身を伸ばしたりしてゆったりとした気持ちで皆さまのお出迎えをします。ひどい雨風のときは個室で過ごすこともありますがそれ以外は閉園時刻まで外にいます。もともとアフリカの動物ですから暑さには強いほうですが、日本の蒸し暑い夏は苦手なようで、夏の日中はほとんどじっとしています。飲み水は欲しいだけ飲んでいますが、暑くても水浴びのようなことはしません。体の汚れを落とすのは水ではなく砂浴びによって十分な清潔を保っています。

屋外でお腹を天に向け、安心しきった格好で寝そべるのは、さすがに百獣の王であるからこそ。夕方４時 30分には個室に入り、待ちわびた１日１回の食事時間です。食事は馬肉 3.5 kgと鶏肉２～2.5 kg。また週に２回の絶食日があります。このくり返しで明日の朝を迎えます。

―アレン―

アレンは、2013年５月９日生まれのオスのライオンで、群馬サファリパークから来ました。赤ちゃんの時から人の手で育てられたため、人なつっこくて物怖じしない性格です。トウヤと比べると、尾が長く、たてがみはふさふさしていて毛の色は濃くおなかまでつながっています。来園時はまだ２歳で幼さが残っていたアレン。飼育係さんによると、この１年で行動にも落ち着きがみられるようになり、体も大きくなって、心身ともに成長を感じるそうです。

アレンはガラス展示場にいることが多く、ガラス越しにその迫力ある雄姿を見せてくれます。よく階段の上に座っていますが、時にはすぐそばまで来て寝そべったりゴロゴロしたり、前足でガラスを引っかくような仕草をすることも。そんなときは立派なたてがみや足のうらまで近くで観察できます。また、展示場内に生えている草を食べることもあり、これはおなかの調子を整えるためで、ネコと同じですね。

野生のライオンは昼の間ほとんど休んでいて、１日に18時間くらい寝ていると言われます。動物公園でも寝ていることが多いのですが、こんなふうに無防備な寝姿を見せてくれるのも、天敵のいないライオンの特徴のひとつと言えるでしょう。起きて動く姿を見るには、朝、開園してすぐと夕方の閉園まぎわがチャンスです。

≪１年を振り返って　―　飼育担当者≫

◆当園で初めてのライオン飼育係となって早１年、アレンもトウヤもとても素晴らしいライオンです。人懐っこいアレン、ライオンらしい雰囲気のトウヤ、それぞれ性格が異なっているのも素敵です。ガラス展示場と平原をイメージした広い展示場、それぞれの展示場にあった性格のライオンが来てくれて本当によかったです。平原でどっしりと構えているトウヤや、目の前で足の裏やお腹まで見せてくれるアレンにぜひ会いに来て下さいね！（髙橋宏之）

◆個人的なイメージで、ライオンは人にほとんど興味を持たない動物なのかと思っていました。しかし、知っている人、知らない人で区別をしていることを感じた時には驚きました。また、主張も強く、部屋に入りたいときのアピールをしたり、おもちゃを投げ入れる時には期待のまなざしを向けてくることもあり、意外と色々なことに興味を持つことに気付かされた一年でした。これからも気づいたことをみなさんと共有できればいいなと思っています。（佐藤安優美）

元気いっぱい若いカップル
― アカハナグマ ―

アカハナグマは、南アメリカのアライグマの仲間でおもに森林で暮らしています。赤い鼻のクマではなく茶褐色（アカ）の毛色をしたハナグマという意味です。野生では果実や小動物のほか、細長い曲がる鼻と強力な前足を使い、茂みや土の中の昆虫やミミズなどを探し出して食べます。また、木登りも得意で、10mくらいの高さであれば軽々と登るそうです。

当園の２頭は、ともに今年２歳になる若い個体で、昨年11月に長崎バイオパークからきました。メスのミミは少し臆病で尻尾が短いのが特徴です。一方、オスのヒカリは、好奇心が強く堂々としていて、来園者をじっと見つめることもあります。アイコンタクトしてみてはいかがですか。

ちがいを見つけてね
―ケープペンギンとフンボルトペンギン―

当園には２種類のペンギンが合わせて２７羽います。鳥類水系ゾーンには南アフリカに生息するケープペンギン、子ども動物園には南米のフンボルトペンギンです。

かれらはアジを１日 300ｇほど食べ、泳ぐスピードは時速 10～20ｋｍとオリンピックでは楽々金メダルを取れるほど。ケープペンギンは地下通路から水中の姿を見ることもできます。飛ぶような泳ぎを見てくださいね。

この２種は大変良く似ていますが、見分け方のポイントは、フンボルトペンギンはケープペンギンよりも胸の黒い横帯が太くて、クチバシの付け根のピンク色の部分が多いこと。体格はほぼ同じですが、フンボルトペンギンの方が少し大きいです。

★ボランティアが毎月第２、第４日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイド「ZOO ポラ・クイズ DE ガイド」をしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

リスじゃないよ、サルの仲間
― レッサースローロリス ―

夜行性動物展示室に、新しい動物がお目見えしました。東南アジアのジャングルにすむ小さなサルの仲間、レッサースローロリス２頭です。メスは2013年生まれでアクアマリンふくしまから、オスは2012年生まれで埼玉県こども動物自然公園からの来園です。

体重は500ｇ前後。大きな目が正面を向いているのは、暗やみの中で虫を捕まえるのに距離を正確にはかるため。腕からの分泌物を口に含み、唾液と混ぜて毒を作ることが知られていますが、その毒をどのように利用するのかは明らかになっていません。

野生では昆虫、果実、樹液を食べます。当園でのエサはニンジン、パプリカなどの野菜とリンゴ、ミルワーム（幼虫）、コオロギなど。朝10時ごろエサをあたえるので、午前中が活動的です。

★ボランティアによる「絵本のおはなし会」が毎週土曜午前11時30分より12時まで動物科学館２階図書室で開かれます。小さいお子さんはぜひどうぞ。

★ボランティアの樹木チームが、園内の木に順次名札をつける作業をしています。花や葉っぱの美しい木や枝ぶりの見事な木など、お気に入りの木が見つかったら、名前を確かめてみてください。

第２８号（2017年夏）
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7

ボランティアがえらんだ

セブンプラス

①4つ子の赤ちゃん誕生！

― ミーアキャット ―

４月２８日ごろ、ミーアキャットのマルが赤ちゃんを産みました。おとうさんはカンタです。地下の巣穴で産んだので、飼育係さんも生まれたての様子はわからなかったそうですが、５月中旬に巣から出てきた子どもたちは４頭。その頃は、まだとても小さくて足元がおぼつかない様子で、必死にお母さんのおっぱいに吸い付いていました。その後、お母さんから離れる時間が増えていき、子どもたちだけでじゃれあって遊んだり、団子になって寝てしまったり、元気で仲良しな姿を見せてくれています。

よく見ると、体の大きさや顔つき、性格も１頭１頭ちがいます。じっくり観察して、お気に入りを見つけてくださいね。

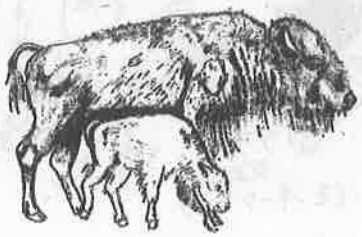
②あまり似てないけど、親子です

― アメリカバイソン ―

本年４月、アメリカバイソンのカップルに８年ぶりに元気な仔どもが誕生。メスで、カフェラテの色に似ているのでラテと名付けられましたが、成長と共に親と同じ暗褐色（あんかっしょく）に変化します。

子育ては優しいおかあさんのヒートとスパルタ教育のターバンの連係プレーでバッチリ！ヒートは面倒見がとてもよくミルクもしっかりあげている姿を目にします。ターバンは一見ラテを追いかけて意地悪をしているように見えますが、それで実はラテの足腰がきたえられているそうです。

おとなのバイソンは、うしろ姿はスリムなお尻。それが正面を向くと獅子舞（ししまい）の獅子頭（ししがしら）のような大きさで迫力あり、そのアンバランスが魅力です。そんな姿にラテはいつ頃なるのか楽しみです。



③ただいま 保全活動中

― ニホンイシガメ ―

ニホンイシガメは、日本国内でだけ生息するカメで絶滅が心配されています。農地の広がる里山の水路等で、楽に上陸できて卵を産む平らな地面があるところが好きです。ところが全国的に川岸をコンクリートで固める工事が進んだために生きられる場所が狭くなりました。その結果、クサガメなどと同じ場所で暮らしているうちに雑種がふえ、純粋なニホンイシガメが生き残れるかきびしい状況となっています。

当園のカメを増やすための施設は子ども動物園のヤギ・ヒツジ広場内にあり、「千葉県ニホンイシガメ保護対策協議会」と協力して事業を進めています。増やせたら、千葉市内のふるさとの川に返すのだそうです。

まだ卵は確認されていませんが、当園生まれの子ガメが市内に放流され、市内の川が『イシガメ竜宮城』に生まれ変わる日も近いかもしれません。

④キジの仲間の色あざやかな鳥

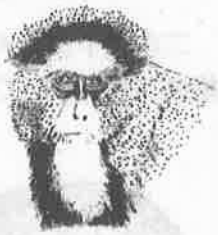
― ハッカン ―

本年３月、当園では初めての飼育となるハッカン（キジ科）がやってきました。来園したのはオトナのオス１羽です。主な生息地は中国東部、南部や東南アジア。山岳地帯の森に生息し、果実、種子、草や昆虫などを食べます。当園では小麦、ひえ、ニワトリ用やキジ用の配合飼料、小松菜、白菜を食べています。

オスは頭と足が赤いほかは黒と白でとても目立つ姿です。メスはもっと地味な外見をしているそうです。危険を感じて逃げる際や枝に止まろうとする時には飛びますが、普段は地上を歩くことが多いようです。気性は荒く興奮すると飛びかかってくることもあるそうですが、このオスは今のところおとなしく悠々と動きまわっています。

⑤ちょっと奇妙で　美しい姿
― ブラッザグエノン ―

ブラッザグエノンは、アフリカ中央にすむオナガザルの仲間で、額のオレンジ色の毛と口先からあごの白い毛が目立つ、世界で最も美しいサルのひとつと言われています。当園で飼育しているのは、ポン（オス18歳）とウーチャン（メス23歳）の2頭です。ウーチャンは、人なつこく飼育係さんが大好き。飼育係さんが「ウーチャン」と言うと、「ウー」と返事をし、手を差し出すと優しく毛づくろいをしてくれるそうです。ポンは物静か、いつも舌を出しっぱなしにしているのが特徴です。



15時過ぎに飼育舎に入ってから食餌（バナナ、オレンジ、キャベツ、煮たニンジンやサツマイモ、リンゴ、サル用ペレット、落花生、煮干やミルワームなど）をとります。食べているところを裏の通路側からごらんになれます。

⑥もふもふの癒しキャラ
― アルパカ ―

アルパカは南アメリカの高山にすむ家畜です。毎年夏が来る前に、ふわふわの毛が刈られ上質の毛糸になります。

当園の「ふれあい動物の里」には、とても仲良しのメスが2頭います。白くて大きいのがキャンディ、茶色くて小さいほうがミッティーです。いつもは柵の中にいて、えさ（有料）をあげてふれあうことができます。お気に入りは、アニマルクッキー。人なつこくてやさしい目をしているアルパカですが、案外気が強く、興奮するとツバを吐くこともあります。

時には柵から出て、西口でみなさんのお迎えやお見送りをすることがあります。また土日の午後には、「ふれあい動物の里」の中をお散歩もします。ぜひ近くでいやされてくださいね。

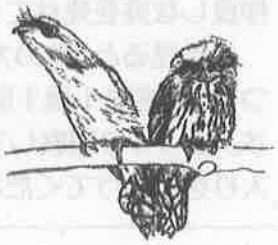
★ボランティアが毎月第2、第4日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイド「ZOOポラ・クイズDEガイド」をしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

⑦木になったフリをする鳥
― オーストラリアガマグチヨタカ ―

本年5月、埼玉県こども動物自然公園から、2羽のオーストラリアガマグチヨタカがやってきました。夜行性動物展示室で見られます。少し小さい方がオス、大きい方がメス。口がカエルのように幅広く、クチバシの上には堅いひげのような羽があります。自然界では夜に飛んでくる虫を捕って食べ、カエルなどを食べることもあるそうです。当園ではそれぞれネズミを毎日1匹与えています。

野生では、日中は木の幹に近い枝の上などで休み、危険を感じると口を上に向け、体を伸ばしてジッと動かなくなり、木の一部のように変身（擬態）します。昼夜の逆転した展示室では、夕方4時ごろから明るくなると、擬態を見るチャンスがあるかもしれません。



★ボランティアによる「絵本のおはなし会」が毎週土曜に開かれます。時間と場所は園内放送でお知らせしますので、小さいお子さんはぜひどうぞ。

★動物科学館バードホールのフタユビナマケモノが5羽に赤ちゃんを出産しました

第２９号（2017 年～2018 年）
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7

ボランティアがえらんだ

セブンプラス

①究極のスローライフ
― フタユビナマケモノ ―

ナマケモノの生き方はとてもユニーク。中南米の熱帯林で、長く曲がったツメを木の枝に引っ掛けてぶら下がり、１日の大半を眠って暮らします。木から降りるのは数日に１度のトイレのときだけ。ワシやジャガーなどの敵に見つからないようゆっくり動き、地味な色の毛はコケが生えやすい構造で、周囲の風景に溶け込みます。おもに木の葉を食べますが、自分の体についたコケを食べることもあるそうです。あまり動かないので食べる量も体格のわりに少しです。

バードホールには 2017 年５月生まれの赤ちゃんとその両親がいます。広いので見つけにくいですが、備え付けの双眼鏡で探してみてください。夜行性動物舎にもう１頭、メスのナマケモノがいて、こちらは近くで見ることができます。

②顔とお尻で存在をアピール
― マンドリル ―

ナマケモノとは対照的に「なぜそこまで目立つ必要がある？」と不思議な気持ちにさせる、色鮮やかなメーキャップをしたようなマンドリル。赤や青は毛ではなく、皮膚の色です。大きくて派手なのはオスで、メスはその半分くらいの体格。アフリカのガボン、カメルーン等限られた地域の熱帯雨林に生息し、絶滅が心配されています。群れを作っておもに地上で生活し、食べ物は植物や昆虫など雑食です。

当園にはオス１頭とメス２頭がいます。活発に動き回るほかのサルたちに比べると、動きがゆっくりで物静かな印象を受けますが、たまに口を開けたところを見るとキバがすごく長くとがっていてちょっと怖い感じです。国内では 23 の動物園で 71 頭ほど飼育されています。

③てぶくろはペアルック
― アカテタマリン ―

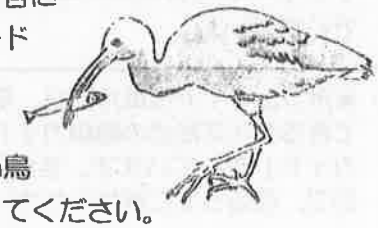
動物科学館の２階には、小型のサル、マーモセットとタマリンの仲間が展示されています。中南米の森に生息し、大きな群れで樹上生活をして、子が生まれると父親や群れの仲間が育児に協力するのが共通の生態です。

2017 年春にアカテタマリン２頭が仲間入りしました。顔も体も黒く、オレンジ色の手袋と靴下を着用しているような姿がチャーミング。しっぽの長いほうがメスで、2014 年９月生まれ、愛知の日本モンキーセンターから来ました。オスは 2015 年６月生まれ、静岡の日本平動物園からの来園です。別々の所から来たのに今ではすっかり仲よしで、一緒に行動しています。人が来るとかわるがわる、大急ぎで近づいて顔をのぞいたりする様子が楽しいです。

④赤いものが好物で　体も赤くなった
― ショウジョウトキ ―

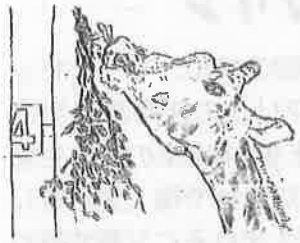
ショウジョウトキは、南アメリカ北部に棲息するペリカン目トキ科の鳥で、鮮やかな朱色をしています。海岸やマングローブの林に群れで暮らし、カエルや魚類、エビなどの甲殻類を食べています。鮮やかな体の色は、フラミンゴと同様に、エサであるエビやカニなどの色素のせいです。動物公園ではエサに色素が含まれたオキアミやフラミンゴペレットを与えることで、体の色を維持しています。生まれたばかりのヒナは灰色ですが、約２年で親と同じ朱色になるそうです。

鳥類水系ゾーンのトキ舎に１羽、動物科学館のバードホールに２羽います。フラミンゴ以上に鮮やかな色をした美しい鳥なので、ぜひご覧になってください。



⑤ガムをかんでるみたい
―アミメキリン―

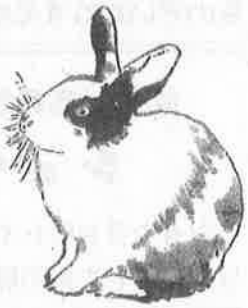
みなさんはキリンの絵を描くとき、何色でぬりますか？　「黄色！」と答えた人は本物を見に行って、何色か確かめてくださいね。当園にはメスのサツキとオスのヨウタがいます。もようのクッキリしているほうがヨウタです。



キリンがエサの時間でもないのに口をモグモグしていたら、それは１度飲み込んだ食べ物を胃から口に戻して噛み直しているところ。これは反芻といって、ヤギやヒツジなどウシの仲間の特徴です。キリンもウシの仲間なんですよ。首が長いので、のどのところをエレベーターのようにスーッと食べ物が降りていき、しばらくするとまたスーッと上って口に戻り、噛み始めるのが見えます。ゆっくり観察してください。

⑥ふわふわ　あたたか　ちょっとワガママ
―ウ　サ　ギ―

子どもたちに人気のウサギには「ふれあい動物の里」で会うことができます。



ここにいるのは穴を掘る習性のアナウサギを家畜改良した、色やもよう、大きさも様々なウサギたち。トレードマークの長い耳には毛細血管がよく見えます。ウサギは汗腺がないので耳で体温調節をするんですよ。草などを噛み切るために、するどい前歯が二重に生えているので、ウサギの口元に指を近づけたりしないでね。鼻や耳がよく動いているのは、においや音で周りの様子をうかがっているのです。

ジャンプが得意で丈夫そうに見えますが、じつは骨が弱いのも特徴のひとつ。無理に抱こうとしないで、ウサギの自由気ままに合わせながらふれあいを楽しんでくださいね。

★ボランティアが毎月第２、第４日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイド「ZOOボラ・クイズDEガイド」をしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

⑦道具を使ってタマゴを割る
―エジプトハゲワシ―

この鳥の展示場は鳥類水系ゾーンの中で展望デッキに最も近い所にあります。その名前からは大きな体に獰猛な顔を想像されるかもしれませんが、実際はヨーロッパに生息するハゲワシの中で最も体の小さい鳥で、ちょっとニワトリに似ています。

ヨーロッパ、アフリカ、中東、インドに生息し、大型の動物から鳥や魚まで、あらゆる生き物の死骸などを食べます。また、まことに頭の良い鳥で、大きくて殻のかたいダチョウの卵を食べるときは、口にくわえた石をぶつけて殻を割りその中身を食べます。

当園でのエサは１日１羽あたり鶏頭150ｇとウズラの肉30ｇほどを食べています。オス１羽、メス１羽、性別不明１羽の成鳥３羽が展示されています。

★ボランティアによる「絵本のおはなし会」が毎週土曜11時30分より動物科学館２階図書室で開かれます。小さいお子さんはぜひどうぞ。

第30号（2018年春）
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

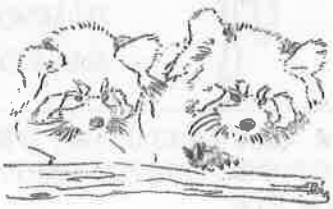
ボランティアがえらんだ 千葉市動物公園の見どころ7

セブンプラス

それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください。

①全国で活躍　風太の子や孫たち
―レッサーパンダ―

かつて「アライグマ？タヌキ？」などと誤解されたレッサーパンダ。今では多くの方がすぐにわかります。その立役者は2005年に大人気となった風太です。風太は現在14才（飼育下の寿命は15～17年）。レッサーパンダは生息地の中国・ネパール・インドなどでは絶滅が心配されており、日本国内では血統登録をして近親交配などないように繁殖、飼育しています。当園生まれの風太の子や孫たちも新たな家族を作るため他所の動物園に旅立ちました。今では風太の血縁は全国に広がり、2016年12月末時点で子8頭、孫18頭、ひ孫12頭、玄孫（やしゃご）1頭がいます。当園でも近い将来、孫のみいと昨年来園したライムの間にひ孫が生まれ、4世代となることを楽しみにしています。



②きれいな目でこちらをじっと見る
―ジェフロイクモザル―

中央アメリカのメキシコからパナマにすんでいるジェフロイクモザル。全体がほっそりとして長い尾や手足で移動する姿から「クモザル」は納得のネーミングですね。しっぽはバランスをとるだけでなく、木にぶら下がったり物をつかんだりと、とても器用に動くので、第5の手足と呼ばれます。尾の先の内側には毛がなく尾紋（びもん）があり、指紋（しもん）のようです。手は親指がなくなって4本指になっており、長い腕と足としっぽを使って枝にぶら下がりながら木から木へスイスイ移動します。

当園にいるのはライズという名の39才のオスです。しばらく見ていると好奇心が強いライズはヒョイと目の前にやってきますよ。そんな時はチャンス！　尾の先や手をよく見てくださいね。

③自慢のクチバシ　欠かさずお手入れ
―オニオオハシ―

バードホールに元気な若いオニオオハシ3羽（オス1、メス2）がやってきました。あざやかなオレンジ色の大きなクチバシが特徴で、体に占める割合が鳥の中でも1番。でも重さはたった10円玉3個分！何で大きいの？理由は体温調節のため、微細（びさい）な血管を通じ体内の熱を逃がす役割をしていると言われています。一番の見どころはシャワータイム。午後2時40分のスコールの後、ガジュマルの枝伝いに落ちてくる水に打たれてクチバシをこすったりします。次はモグモグタイムで、9時45分～10時頃にエサ台からエサをクチバシでつまんでは放り上げ口の中に落とす姿が見られます。エサはバナナ、オレンジ、リンゴ、ふかし芋、ニンジンなど。

④小さくて軽くてあたたかい
―ハツカネズミ―

当園で飼育しているハツカネズミは家畜化されたアルビノ種で、生まれつき体の中でメラニン色素を作ることができないため、白い体毛と、血管が透（す）けて見える赤い目をしています。中央アジア・ヨーロッパ・アメリカ大陸など世界中に分布し、日本でも古くから愛玩用に飼われてきたようです。妊娠期間が約20日で、それが名前の由来といわれます。体長とほぼ同じくらい長いしっぽを持ち、このしっぽと爪を使ってヒモの上を綱渡（つなわた）りするのも上手です。

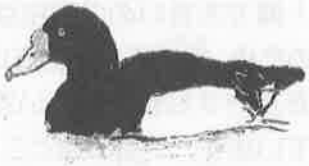
子ども動物園では10時半～12時、13時～14時、14時半～15時半にハツカネズミを手にのせることができます（2歳以上の人限定）。歩き回る柔らかい4つの足の感触を体験してみてください。

⑤引っ越して 繁殖の準備中

― ベニバシガモ ―

フラミンゴ池のすみに、ベニバシガモのペアがいます。南アメリカ中央部にすむカモで、その名の通りオスのくちばしはあざやかな赤色です。メスのくちばしは灰色で、体の色もオスとはちがいますが、近くにいるのですぐわかります。落ち着いた環境で繁殖してもらうため、たくさんの水鳥がいる水鳥池から、オシドリのペアといっしょに引っ越してきました。フラミンゴたちとは、仲良くすみ分けているようです。

オスが派手なカモの仲間は子育てをメスだけで行うものが多く、ベニバシガモも卵を温めたりヒナの世話をするのはメスの役目です。ヒナは生まれるとすぐお母さんについていき、自分でエサを食べます。かわいい赤ちゃんが見られるといいですね。

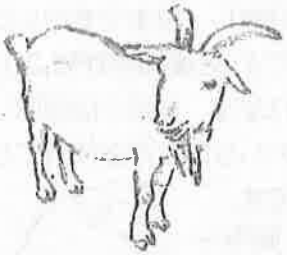


⑥大昔から人と暮らしてきた

― ヤ　ギ ―

ヤギは、今から１万年くらい前から人間に飼われていて、今でも世界中で愛されている家畜の一つです。「ふれあい動物の里」に、シバヤギ、トカラヤギなどがいます。ヤギはとても人なつこく、子どもたちから直接エサをもらって食べています。でも、時々大きなツノを振り回すので、飼育係さんはお客さんがケガをしないようにとても注意しています。

ヤギの原種はけわしい岩山に住んでいたパサンを中心に複数の野生ヤギが掛け合わされたと言われており、高い所へ登るのが大好きです。「ふれあい動物の里」には高さ３メートル、長さ20メートルほどの木橋があり、運が良ければその上をヤギが怖がりもせずに軽快に走って行く姿が見られます。



★ボランティアが毎月第２、第４日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイド「ZOOボラ・クイズDEガイド」をしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

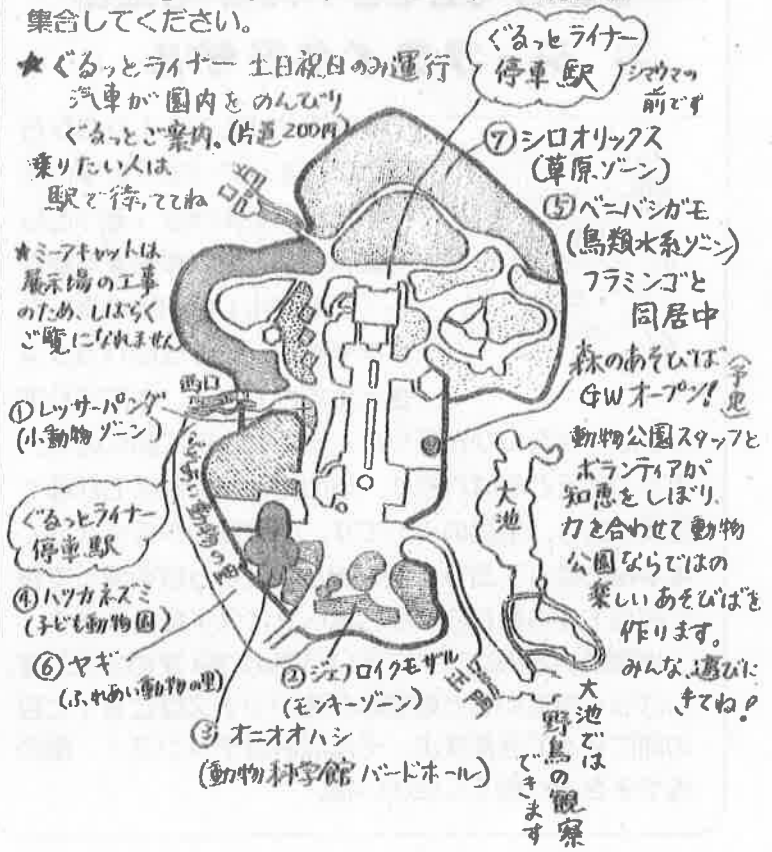
★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

⑦長いツノが美しい

― シロオリックス ―

シロオリックスはアフリカの砂漠や平原、岩場などに生息するウシ科の動物です。りっぱな細長い角は中東の曲がった刀「シミター」に見立てられ、英語名にもその名前がついています。白い体に首から胸にかけて赤茶色の斑があり、目のまわりにはピエロのような模様があります。乱獲等で野生では一度絶滅してしまいましたが、国際的な協力のもと、動物園などで保護・繁殖されていた個体を野生に戻す努力がされています。

エサは生の牧草、干し草、ペレット等。本来の生息地が乾燥地帯なので、水を飲んでいるところは飼育係さんもほとんど見たことがないそうです。角は１度折れてしまうと伸びないため、飼育する際には角が折れないように気をつけているそうです。

★「絵本のおはなし会」が毎週土曜 11 時 30 分より動物科学館２階図書室で開かれます。小さいお子さんはぜひどうぞ。

★3月24日から4月21日までの毎週土曜日午後１時半から２時まで、ボランティアが園内の桜を解説する「サクラガイド」があります。動物科学館１階総合案内前に集合してください。